

また、東京都町田市の「永遠の里・いずみメモリアル」の敷地内にも135平方メートルの桜葬墓地スペースを確保、5年越しの夢を実現させました。この桜葬墓地は、3本の桜の木のもとに個別区画が80、共同区画が1つあります。個別区画は70センチ×35センチで、共同区画はみんなと一緒に入る合葬墓です。承継者は不要で、改葬はしない無期限永代使用も大きな特徴となっています。

使用料は、個別区画が30万円（同区画2人目は10万円）、共同区画が12万円、環境保全費が個別区画で20万円、共同区画が8万円です。いずれも毎年の管理費は不要ですが、存命中のみ、会の年会費5000円が必要となります。

すでに書いたように、桜の木は特別な思いをもつ人も多い木であり、また神様の宿る木との考え方もあります。その木の下で眠る桜葬は従来の樹木葬からさらに発展し、合葬墓としての展開も含まれており、しかも全国ネットワークとして発足したことで、今後ますますの広がりが見込まれます。

5. 「庭園葬」という新たな提案も

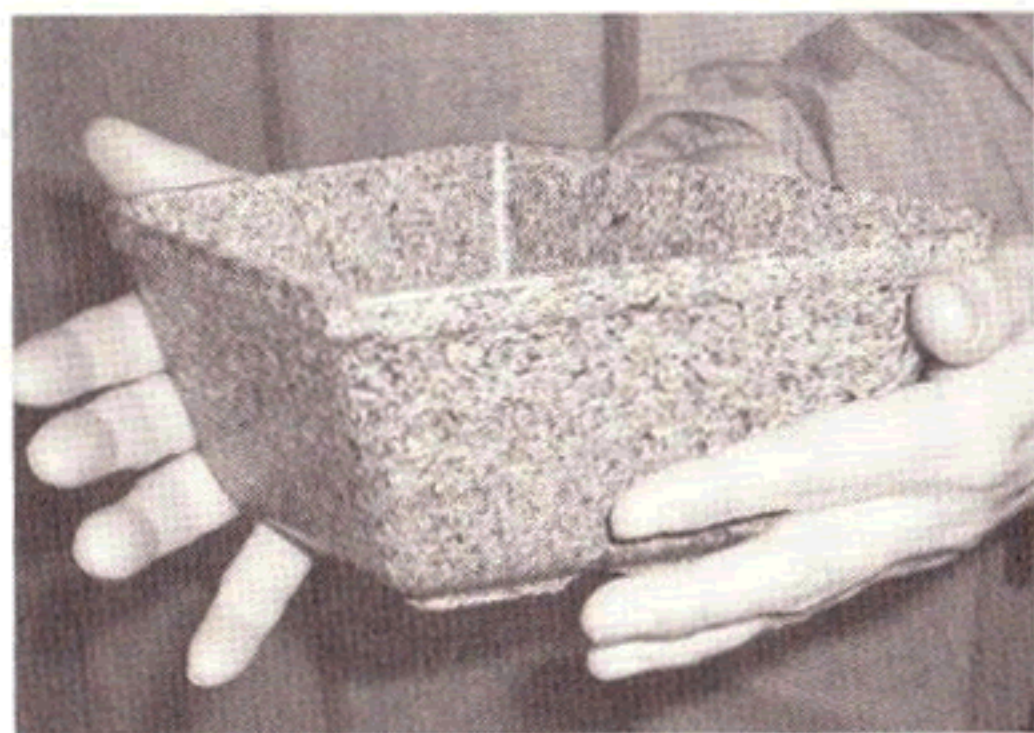
これまでにご紹介した樹木葬とはまったく違いますが、花や植物に囲まれたなかで遺骨を土に還すという点では共通する、新たな提案も出てきました。「庭園葬」とでもいうべきスタイルで、2005年5月に京都市の西寿寺が始めたものです。

同寺の村井定心住職が、参拝者の自然に還る葬法への要望、無縁墓への不安などから、既存の墓地の一画、230平方メートルを庭園墓地として整備し、自然分解性容器に入れた遺骨を好きなところに埋葬できるようにしました。この容器は茶葉が原料で、遺骨とともに触媒（しよくばい）を入れるため、埋めると2、3年で土に還るようになっていきます。また、一部を分骨し、墓入口にある薬師如来（やくしにょらい）の永代供養合祀墓にも納め、線香などを供える場もつくってお参りしやすくしています。

墓地の名称は、中国唐代の高僧、善導大師の説いた説話「二河白道（にがびやくくわう）」にちなみ、「ホワイトロード」。敷石で小道を設け、周囲にサザンカやアジサイなど開花時期の異なる



京都市西寿寺の庭園墓地「ホワイトロード」



独自に考案した水溶性の茶葉製容器
ふたはなく遺骨は和紙で包む

樹木15種類を植え、年間を通じて花が咲く庭園になっています。肥料には古い卒塔婆^{そとうぼ}や生花をリサイクルしたものを使い、エコロジーに配慮した工夫をしています。

納骨費用は、遺骨用の専用容器込みで13万5000円。生前予約の申し込み者は、同寺「薬師の会」の会員となり、寺で年間を通じて行われる行事に自由に参加できます。「血縁」ではなく「結縁」で結ばれた会員同士の生前からの交流も図れるわけです。宗旨宗派は問わず、誰でも申し込めます。

樹木葬とは異なり、里山保全にはなりません。環境に配慮したさまざまな工夫をこらしており、これからのお墓のあり方のひとつの提案として、なかなか魅力ある試みだと思っています。

なお西寿寺では、庭園墓地の拡張許可を得るのが困難だったため、いろいろな椿^{つばき}を植えた「つばきの郷」という専用の散骨場もつくっています。薬師如来の永代供養合祀墓に分骨する仕組みや費用は庭園葬と同じです。この「つばきの郷」は、日本では数少ない専用散骨場といえるところです。